
CLANNAD 杏 After its a wonderful DAYS

わっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C L A N N A D 杏 A f t e r i t s a w o n d e r f
u l D A Y S

【Nコード】

N 3 1 0 8 L

【作者名】

わっち

【あらすじ】

杏と朋也が付き合い
始めてから一年後
その後の生活や
世界観を語る
泣ける要素も
もちろん追加予定♪

序章

CLANNAD
『杏 After』
its a wonderful DAYS
『

序章

・夏　それは私、
いや私たちにとって
大切な、そして大事な
思いのある季節
高校3年の夏
私と彼は、
この季節に始めて
一緒に過ごして
行く事を誓った季節
そして翌年の夏
私も彼も、無事に
高校を卒業し、
春からそれぞれの
道を歩んでいた
彼はアパートで
1人暮らしを始め、
地元の小さな
電工会社に就職した。
彼は始めの頃は慣れない
力仕事に苦戦を

していた事を思い出す。

そんな彼を私は

心から支えた。

仕事を終え、

力尽きて床に

つつぶした彼を

励ましたりすると

「お前がいてくれるから

俺はがんばれる

ありがとな」

と彼は言っ

くれたりする事がある。

その時は心から

嬉しく思い、

私は彼をますます

好きになつていった。

私が励ます事で彼が

がんばれるなら、

私は彼を精一杯

応援する。

そんなこんなで

学生時代は言うところの

不良だった彼も、

今や立派な社会人♪。

え？私？

私はというと卒業後、

市内にある大学へと

進学した。

保育士を目指す為に

日々勉強をしている。そんな感じで
日々を過ごして来た

そしてあつという間に

夏になり、そして

春からこんな生活を

続けている。

そろそろ私と彼が

付き合ってから

1年か・・・

序章　END

二人の夏時間（前書き）

第一話です

序章から話を
つなげて下さい

登場人物

- ・岡崎 朋也
- ・藤林 杏
- ・藤林 涼（劇中では藤林）

二人の夏時間

第一話（二人の夏時間）

朋也「ただいま」

杏「あ、朋也おかえり♪
今日もお疲れさま♪」

仕事を終え、帰宅した俺を杏は暖かい笑顔で迎えてくれた

朋也「今日も疲れたよ
でも、だいぶ慣れて
きたから始めの頃よりは
楽になつてきたかな」

杏「それって上達した
つて事じゃないの？」

朋也「かもな。あ、杏、
何か手伝う事はないか？」

杏「ううん、大丈夫
もうちょつとで
終わるから」

朋也「わかった、じゃあ

居間で休んでいいか？」

杏「うん」もうすぐ
できるから、できるまで
ゆっくり休んでて」

杏は俺の仕事が終わる
より早く大学が終わる為
こうして、いつも
俺の家に寄って
家事を率先して
やってくれている
俺が1人暮らしを
始めた頃の事だ
俺が家事ができない事を
知った杏は大学の帰りに
俺の家に寄り、家事を
やっておくと言い出した
最初は大学の勉強等も
あるので杏の負担が
増えると思って
断ったのだが
杏は決して譲らなかった
どうしても俺の役に
立ちたいんだそうだ
その後、ほとんど毎日、
帰りに俺の家に寄り
家事をこなして
くれている
そのおかげでホント

助かっている

もし、杏が家事を

やっていてくれ

なかったら

俺は絶対に1人暮らしは

まともにできて

いないと思う

ホント杏には感謝で

いっぱいだ

俺の最高の

彼女だと思う」

家事もしてくれるし

それに可愛い

何より優しく

俺の事を気に

かけてくれる

ホント俺には

もったいないくらいの

最高の彼女だ。

ただ一つ・・・

凶暴な所を除いたら・・・

杏「朋也」できたわよ」

そんな事を考えていたら

夕飯ができたらしく

杏が料理を黙々と

居間の机に並べ始めた

朋也「うまそうだな」

杏「そうでしょ」
早く食べちゃお」

朋也「ああ」

杏「それでは
いただきます」

朋也「いただきます」

杏「どう？おいしい？」

朋也「ああうまい！」

杏「えへ？よかった」

朋也「う」

俺は思わず声を
もらしてしまった
喜んでゐる杏が
あまりにも可愛かった

杏「う、って
どうしたの？」

朋也「いや？何でもない」

杏「ホントに？」

朋也「ホントだ？」

杏「ならいいけど、何か隠してないわよね？」

朋也「ないないないない」

杏「そ、ならよかった」

ホント可愛い

可愛いし家事も

そつなくこなすし

料理もうまい

ホント俺には

もったいないくらいだ

ホント凶暴な所を

除いて………

杏「今、何か失礼な事を
考えなかった!？」

朋也「いやいやいや!?!? 考えていません」

何でわかったんだ?

心の中でも読めんのか?

杏「あ、言葉がおかしい!何か隠してる!?!」

朋也「隠してないっ!」

杏「ホントに！？」

隠してたら

承知しないわよ！！」

朋也「杏・・好きだ！」

・・・これでどうだ！？

杏「あたしも大好き！」

な、何とかごまかせた
みたいだな・・・

・・・・・

朋也「ごちそうさま
うまかったよ」

杏「えへへ」よかった
明日もまた夕飯作って
あげるからね？」

朋也「いつも悪いな」

杏「いいのいいの
朋也の為だもん
気にしないの」

朋也「ホント助かる

杏にはホント感謝
してるからな」

杏「えへへ」

ホント嬉しそうだな
この笑顔を見るだけで
俺は癒される

・
・
・
・
・
・
・
・

夕飯を食べた後は
杏が21時頃まで大学の
勉強をして帰るのが
いつもの日課に
なっていた

とは・・・言っても
杏が自分で黙々と勉強を
進めいるワケで・・・
俺はまったくの無力
である・・・

学生時代に怠けていた分
こういう面では
協力ができない事が
悔しい・・・
だが・・・今更悔やんでも
過去はやり直せない・・・
過去は・・・

杏「じゃあ、

そろそろ帰るね」

朋也「え！？あ、
ああ、途中まで
送って行こうか？」

気がついたら時間は
20時55分だった

杏「大丈夫♪そんな遠い
ワケじゃないし
朋也も疲れてそう
だから、早く寝て
ゆっくり休んだ方が
いいわよ♪」

朋也「ホントに
いいのか？」

杏「うん♪大丈夫」

朋也「そうか、じゃあ
また明日な♪」

杏「うん！あ、
ん」

そう言っただけは
顔を近づけて来た
この仕草は杏が

キスを求める合図だ
俺は杏に軽く
キスをした

杏「えへへ」
じゃあまた明日ね」

朋也「おう！また明日な
大好きだぞ杏！」

杏「うん！あたしも
大好き！！じゃーね」

杏は満足そうに
俺の家を後にした
こんな感じの日々を
俺たちはほとんど
毎日送っている
今、俺は幸せだと思う
杏と付き合ってから
日々が新しく
変わっていった
墮落していた日々から
誰かの為にがんばって
誰かに必要とされ
誰かに支えられ
誰かに愛される生活
昔の俺なら・・・
そんな事・・・
考えもしなかっただろう

これも杏・・・

いや、あの時

藤林との事があつてから

俺たちは・・・

変わり始めたのか・・・

第一話　完

二人の夏時間（後書き）

第一話です

力不足で至らない点も

あると思いますが

応援よろしく

お願いします

感想等をいただけると
嬉しいです♪

過去の証（前書き）

一話の最後と話を
つなげて下さい

今回は過去の話です

登場人物

- ・岡崎 朋也
- ・藤林 杏
- ・藤林 棕（劇中は藤林）
- ・春原 陽平
- ・柊 勝平（原作キャラ）

過去の証

第二話（過去の証）

俺は・・・過去に

取り返しのつかない

過ちを犯してしまった

自分の気持ちに素直に

なる事ができず・・・

1人の少女を・・・

傷つけてしまった

だがこの事をきっかけに

今の生活が

あるようなものだ

だから、俺は絶対に

この出来事を忘れる

ワケにはいかない・・・

あの日々の事を考えると

今でも心が痛む・・・

でも、どれだけ心が

痛んでも・・・

その時、彼女と過ごした

わずかな日々を・・・

忘れるワケには

いけないんだ、絶対に

あの日々・・・

それは去年、

高校3年の春の事だ

棕「私・・・」

岡崎くんの事好きです！
私と付き合って下さい！」

俺は1人の少女に

告白された。

彼女の名前は藤林 棕

苗字からわかるとおり

杏とは姉妹であり、

杏の双子の妹だ

俺は藤林に告白された

俺はOKの返事を出し、

その時から藤林と

付き合う事になった

俺は、藤林に俺を好きに
なった理由を

一度聞いた事がある

高校2年の球技大会が

きっかけで俺を好きに

なったんだそうだ

それ以上は

恥ずかしいらしく

教えてくれなかった

そして3年の春に

告白を決心したそうだ

そして俺たちは

付き合う事になったの

だが・・・

俺は自分の気持ちを

偽ったまま、藤林と
付き合っていた・・・
俺が心から見ていたのは
藤林じゃなく・・・
姉の杏だった
でも、その気持ちに
素直になる事が
できなかった
杏を選べば藤林が
傷つく・・・
藤林を選べば杏を
傷つける事になる・・・
それが怖くて、
俺は片方を選ぶ事が
できなかった・・・
だから、2人とも
選ばずにいようと思った
しかし、
ある1人の友人が
俺の迷いを
断ち切ってくれた
そいつは普段はバカだが
時には人の心を
変化させるような言葉を
言ってくれる事もある
そいつは春原 陽平
当時、俺の最も
心許せる友人だった
春原のおかげで
俺は自分の気持ちに

素直になる事ができた
でも、藤林はまだ
俺の事を好きでいる
別れを告げようと
思ったが・・・
上手くいかなかった
だがしばらくした後
今の生活が始まる
きっかけとなる
出来事が起きた
俺は教室で藤林に
別れを告げた・・・
だが・・・それは
藤林ではなく、
髪をショートに切り
藤林と同じような髪型に
なった杏だった
杏が言うには
藤林が杏にも自分の
気持ちに素直になるよう
に言ったらしい
藤林が自分の為に杏が
気持ちを偽るのを止めて
正直になって、と

藤林「私は・・・
大丈夫だから」

と言ったらしい
そして杏も自分に素直に

なる事ができ、

俺と杏の、今の関係が

出来上がった

だがそれは

俺は藤林の心を傷つけて

藤林が認めたくなかった

ホントの事実を認めて

ここまで俺と杏は

辿り着いた・・・

これは俺と杏だけの

問題じゃない

互いに誰かの支えが

あったからこそ、

そして、そのおかげで

自分の気持ちに素直に

なれた事・・・

この出来事を俺は

決して忘れてはならない

藤林と付き合っていた

時間も決して・・・

忘れてはならない

それが・・・

この出来事の日々全てが

今の俺たちが

存在する証だから・・・

・・・

??「・・・や!と・・・や!
とも・・・や!」

杏「朋也っ!!!」

朋也「えっ!?!」

杏「えっ!?!」

じゃないわよ!!!
どうしたのよ?

食事中に急に
ぼーっとして!

夕飯が冷めちゃう
じゃない!!!」

朋也「あ、ああ・・・悪い」

杏「あ・・・もしかして
今日のご飯・・・
美味しくなかった・・・?」

朋也「そんなことないぞ
すつつつごくうまい」

杏「ホントに?」

朋也「ホントだ」

杏が作ってくれる

ご飯は全部うまい!」

杏「ならよかった♪
早く食べちゃおう♪」

朋也「ああ」

杏「あ!!」

朋也「!?!ど、どうした?
いきなり大声をあげて?」

杏「そっいゃ、あの子が
言っただけだ!
もうすぐ勝平が退院
できるかもだって!」

勝平というのは

柊 勝平、現在の

藤林の彼氏だ

去年、勝平は骨肉腫
という足の病気で

足の手術を受けた

手術は成功し、

現在は藤林と共に

リハビリ中だったのだから

だいぶ回復したらしい

前にお見舞いに

行った時は歩行器を

外して歩く事に

挑戦していたのを

覚えている

朋也「ホントか!？」

杏「うん」思ったより
だいぶ回復が

早いらしいわよ

棕の愛情のこもった

看病のおかげ

かしらね」

朋也「そうだろうな」

あ、明日は日曜日だし

俺は仕事は休みだから

勝平のお見舞いに

行かないか？」

杏「いいかもね」

私も休みだし」

朋也「よし、じゃあ

決まりだ」

勝平・・・早く

退院できるといいな」

杏「そうね」

そしたら棕も

落ち着いて

勝平と過ごせるかもね」

朋也「ああ、そうだな

あの2人も早く幸せな
生活を送って欲しいからな
あ、ごちそうさま

今日もかなり

うまかったよ」

杏「よかった」

また明日も作るね？」

朋也「おう、楽しみだ」

・
・
・
・
・
・
・

こんな日々があるのも

あの出来事があった

おかげかもしれない・・・

俺は、いや

俺たちはあの出来事を

今がある証として・・・

ずっと忘れずに

心に思い出の一つとして

しまっておくんだ

これからもずっと・・・

第二話　完

過去の証（後書き）

今回は過去の話です
知ってる人もいるとは
思いますが
杏編の話が
含まれています

力不足で
文章が所々
至らぬ点も
あると思いますが
感想等をいただけると
嬉しいです♪

幸せのお見舞い（前書き）

第三話です

今回は二話の最後部分

からの繋がり

でお見舞いに行く

話です

登場人物

・岡崎 朋也

・藤林 杏

・藤林 椋

・柊 勝平

幸せのお見舞い

第三話（幸せのお見舞い）

コンコン？

俺は、とある病室の
ドアをノックした

勝平「どうぞ」

中から勝平の声が
聞こえてきた、
声を聞いた限り
元気そうだ

朋也「ちいーっす」

杏「やつほー」

勝平「あ、岡崎さんに
杏さん！

どうしたの？急に」

朋也「今日は二人共、
休みだったから、お前の

お見舞いに来たんだ
どうだ？調子は？」

勝平「だいぶ
良くなったよ
もう普通に歩けるし
ほら」

そう言つて、勝平は
俺たちの前を歩いて
みせた

杏「へえ、だいぶ
回復したじゃない」
椋が言うにはもうすぐ
退院できるみたいだし」

勝平「うん、このまま
の調子で回復が続けば
来月までには退院できる
つてお医者さんが
言つてたよ
でも、前みたいに
走る事はムリかも……
つて言われたよ……」

朋也「そうか……
でも、ちゃんと歩ける

ようになつたら、また
新しい生活があるはずだ
だから気を落とすなよ
今まで藤林に支えて
もらった分、治つたら
今度はお前が藤林を
支えてやるんだ」

勝平「もちろん、
そのつもりだよ
棕さんにはホント
たくさん迷惑をかけた
からね・・・
治つたらたくさん
恩返しするつもりだよ」

足の手術をする前は
目の輝きを失っていた
勝平だったが、今は
輝きを取り戻している
大切な人の為に
何かしてやりたい
事があるからだろう

朋也「そうしてやれ
つてかお前ら
付き合つてんのに
さん付けなんだな

俺が杏って呼びすてに
するみたいに掠とか
せめて掠ちゃんって
呼ばないのか？」

勝平「えつと・・・
なんていうか・・・
その・・・」

朋也「どうした？」

勝平「は・・・
恥ずかしいというか」

朋也「お前ら付き合って
そろそろ１年近いだろ？
呼び捨てやちゃん付けで
呼んでやっても
もいんじゃないか？」

杏「そうよ、
その方があの子も
きつと喜ぶはずよ、
ね」

勝平「うーん・・・
がんばってみるよ」

朋也「がんばる事が
また一つ増えたな」
がんばれよ」

彼女の為に（笑）」

勝平「もうっ！
かわかないでよ」

朋也「ははは」

杏「あはは」

勝平「ふふふっ」

小さな病室に
笑顔と笑い声が響いた

棕「あ、お姉ちゃん、
岡崎くん、来てたんだ」

病室の入り口に
藤林が立っていた

杏「あ、棕！
勝平くんのお見舞いに
来てたのよ」

朋也「よ、藤林
結構元気そうだな勝平」

早く退院できるといいな」

棕「はい♪予想以上に

早く回復してくれて

よかったです♪」

杏「棕の愛情のこもった

看病のおかげかしらね♪」

そう言っていると藤林は顔を
真っ赤にした

棕「おっ、お姉ちゃん！」

杏「あはは〜♪」

棕「もう？

あ、勝平くん、

もう少ししたら

定期検査の時間だから

そろそろ行かないと？」

勝平「あ、そうか？

じゃあ棕さ・・・

棕「じゃ・・・んそろそろ
行こうか」

棕「え？今・・・」

藤林は先ほどより
さらに顔を真っ赤にして
同様している

勝平「な、何かそう
呼んでみたくなって、
い、嫌だった？」

棕「そんな事ないよ
う、嬉しい・・・よ」

勝平も藤林も
爆発するんじゃないかと
思うくらい赤面していた
でも、藤林は心から
嬉しそうだった

杏「アツアツの
お二人さん？
検査はいいのかな？」

二人は、はっと
思い出したように
慌てていた

棕「そうだった！

勝平くん！急がないと！」

勝平「あつ！うん！」

杏「じゃあ、

検査もある事だし

アツアツのお二人さんのお邪魔をしちゃ悪いから私たちは帰るわね」

朋也「そうだな」

邪魔しちゃ悪いからな」

じゃあ勝平、がんばれよ」

勝平「うん、ありがとうさ、早く行こう」

棕「うん、じゃあ

お姉ちゃん、岡崎くん

バイバイ？またね」

杏「がんばんなさい！」

朋也「じゃあな！

二人ともがんばれよ」

そう言って俺たちは

病室を後にした

杏「元気そうで
よかったわね」

朋也「ああ、
あの調子なら早く
退院できそうだな」

杏「ホントよね
あの子達も、早く二人で
幸せに過ごして
欲しいわよね」

朋也「今でも、
幸せそうだけどな
でも、今以上に
幸せになつて欲しいな」

杏「そうよね」
それに、私たちも
今以上に幸せに
ならないとね」

朋也「ああ、そうだな
藤林と勝平も杏と俺も
幸せにならないとな」

杏「うん」

朋也「よし、
じゃあ帰るか」

杏「あ、買い物してから
帰りましょ、
夕飯の材料があまり
なかったから」

朋也「わかった、
じゃあ買い物してから
帰ろう」
行くぞ杏」

杏「うん」行こ？」

俺たちは手を繋ぎ
病院を後にした

・
・
・
・
・
・
・

俺は杏と俺だけじゃなく
藤林と勝平、みんなが
幸せになつて
欲しいと思つた
自分たちだけじゃなく
みんなが幸せな日々を
過ごして欲しい・・・

俺は心からそう思った

第三話 完

幸せのお見舞い（後書き）

いかがでしたか？

今回は棕と勝平の話が中心です

力不足で至らぬ点も

あるかと思えます

ですが感想等を

いただけると嬉しいです

見てくださった方々

ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3108/>

CLANNAD 杏 After its a wonderful DAYS

2010年10月8日12時23分発行